

# 為文學者經

三文字屋金平

青空文庫



棚たなから落おちる牡丹餅ぼたもちを待まつ者ものよ、唐から様やうに巧たくみなる三代目さんだいめよ、浮木ふぼくをさがす盲目めくらの亀かめよ、  
 人にんじん參の呑くびんで首みづ縊ともらんとする白痴漢たはげものよ、鰯いわしの頭あたまを信しん心しんするお怜悧連りこうれんよ、雲くもに登のぼるを願ねが  
 ふ蚯蚓みずともがらの輩みづよ、水みづに影うつる月つきを奪うばはんとする山猿やまざるよ、無芸無能食むげいむのりよくもたれ総身そうみに智惠ちゑの廻まはり  
 かぬる男をとこよ、木きに縁よつて魚うをを求めもとく草くさを打うつて蛇へびを驚おどろ狼うろたへもの狽たへもの者ものよ、白粉おしろいに咽むせて成じやうぶつ 仏ぶつせ  
 ん事ことを願ねがふ艶治郎ゑんぢらうよ、鏡かざみと睨にらめ競くらをして願あがをなでる唐琴屋からことやよ、惣おつて世間一切の善男子、  
 若し遊んで暮すが御執心ならば、直ちにお宗旨を変へて文学者となれ。

我わが所謂いはゆる文学者ぶんがくしやとはフイヒテが『Ueber《ユーバル》』das《ダス》』Wesen《ウエーゼン》  
 des《テス》』Gelehnten《ゲレールテン》』に述べたてし、七むづかしきものにあらず。内な  
 新好いしんかうが『一目土堤ひとめづみ』に穿あぐりし通仕込つうじこみの御作者おんさくしや様方さまがた一連いちれんを云ふなれば、其職分しよくぶん  
 の更さらに重おもくして且かつ尊たふときは豈あに夫かの扇子せんすで前額ひたひを鍛きたへる野幫間のだいこの比ひならんや。  
 夫それ文学者ぶんがくしやを目もくして預言者よげんしやなりといふは生野暮きやぼ一いつ点張いってんばりの釈義しやくぎにして到底咄たうていはなしの出で  
 来るきやつにあらず。我わが通仕込つうじこみの御作者おんさくしや様方さまがたを尊そんすう崇りやくし其利益りやくのいやちこなるを飲きんぎ  
 仰やうし、其職分しよくぶんをもて重おもく且かつ大だいなりとなすは能よく俗物ぞくぶつを教をしえ能よく俗物ぞくぶつに渴かつがう仰やう  
 せらるゝが故ゆゑなり、(渠等かれらが通つうの原則げんそくを守まもりて俗物ぞくぶつを斥罵せきばするにも関かはず。)然しかしな

がら縦令俗物に渴仰せらるるといへども路傍の道祖神の如く渴仰せらるるにあ  
 らす、又賞で喜ばるゝと雖ども親の因果が子に報ふ片輪娘の見世物の如く賞で喜ばるゝ  
 の謂にあらねば、決して心配すべきにあらず。否な、俗物の信、心は文学者  
 即ち御作者様方の生命なれば、否な、俗物の鑑賞を辱ふするは御作者様  
 方即ち文学者が一期の榮譽なれば、之を非難するは畢竟、当世の文学を知らざ  
 る者といふべし。

このゆゑ、此故に当世の文学者は口に俗物を斥罵する事頗る甚だしけれど、人氣の前に枉  
 屈して其奴隸となるは少しも珍らしからず。大入だ評判だ四版だ五版だ傑作ぢ  
 や大作ぢや豊年ぢや万作ぢやと口上に咽喉を枯らし木戸銭を半減にして見せ  
 る縁日の見世物同様、薩摩蠟燭てらくと光る色摺表紙に誤魔化して手拭紙に  
 もならぬ厄介者を売附けるが斯道の極意、当世文学者の心意ぞかし。さりなが  
 ら人氣の奴隸となるも畢竟は俗物濟度といふ殊勝らしき奥の手があれば強ち無  
 用と呼ばゝるにあらず、却て之れ中々の大事決して等閑にしがたし。俗人を教ふる  
 功德の甚深、大にしてしかも其勢力の強盛、宏偉なるは熊肝宝丹の販  
 路、広きをもて知らる。洞簫の声は、嘯として蘇子の腸を断りたれど終にトテンチン

ツトンの上調子仇つばきに如かず。カントにひねつた「ダンス」の Miss 《ミツス》 B. 《ジー》 A. 《エー》 Bae. 《ベー》 瓦斯系織に綺羅を張る印刷局の貴婦人に到るまで随喜渴仰せしむる手際開闢以來の大出来なり。聞けば聖書を糧にする道徳家が二十五銭の指環を奮発しての「エンゲージメント」、綾羅錦繡の姫様が玄関番の筆助君にやいのくを極め込んだ果の「エロップメント」、皆之れ小説の功德なりといふ。よしや一斗の「モルヒ子」に死なぬ例ありとも月夜に釜を抜かれぬ工風を廻らし得べしとも、当世小説の功德を授かり少しも其利益を蒙らぬ事會て有るべしや。

冒険譚の行はれし十八世紀には航海の好奇心を煽し、京伝の洒落本流行せし時は勘当帳の紙数増加せしとかや。抑も辻行灯廃れて電気灯の光明赫灼として闇夜なき明治の小説が社会に於ける影響は如何。『戯作』と云へる檻樓を脱ぎ『文学』といふ冠着けしだけにても其効果の著るしく大なるは知らる。英吉利は野暮堅き真面目一方の国なれば、人間の元来醜悪なるにお氣が附かれずして、ゾオラが偶々醜悪のまゝを写せば青筋出して不道徳文書なりと罵り叫く事さりと野暮の行き過ぎ余りに業々しき振舞なり。さりながら論語に唾を吐きて

梅曆を六韜三略とする当世の若檀那氣質は其れとは反対にて愈々頼もし  
 からず。東京の或る固執派教會に属する女学校の教師が曾我物語の挿  
 画に男女の凶あるを見て猥褻文書なりと飛んだ感違ひして炉中に投込みといふ  
 一ツ咄も近頃笑止の限りなれど、如何考へても聖書よりは小説の方が面白いには  
 違ひなく、教師の眼を窺ふでは「よくツてよ」派小説に現を抜かすは此頃の女生徒  
 氣質なり。例へば地を打つ槌は外るとも青年男女にして小説読まぬ者なしといふ  
 鑑定は恐らく外れツこななるべし。  
 俗界に於ける小説の勢力斯くの如く大なれば随て小説家即ち今の所謂文学  
 者のチャホヤせらるゝは人気役者も物の数ならず。此故に腥き血の臭失せて白粉  
 の香鼻を突く太平の御代にては小説家即ち文学者の数次第々に増加し、鯛は花は  
 見ぬ里もあれど、鯢寄る北海の浜辺、薯蕷掘る九州の山奥に到るまで石版  
 画と赤本は見ざるの地なしと鼻うごめかして文学の功德無量広大なるを説く当  
 世男殆んど門並なり。寄れば触れば高慢の舌爛してヤレシエークスピーヤ翁は造化の  
 一人子であると胴羅魔声を振染り西鶴は九臯に鳶トロゝを舞ふと飛んだ通を抜か  
 し、何かにつけては美学の受売をして田舎者の緋メレンスは鮮かだから美で江戸ツ子

の盲縞はジミだから美でないといふ滅法の大議論に近所合壁を騒がす事少しも珍らしからず。好奇な統計家が概算に依れば小遣帳に元禄を括る通人迄算入して凡そ一町内に百「ダース」を下る事あるまじといふ。

夫れ台所に於ける鼠の勢力の外なる飯焚男が升落しの計略も更に討滅しがたきを思へば、社会問題に耳傾くる人いかで此一町内百「ダース」の文学者を等閑にするを得べき。若し惣ての文学者を驅て兵役に従事せしめば常備軍は頓に三倍して強兵の実忽ち挙がるべく、惣ての文学者に支払ふ原稿料を算れば一万噸の甲鉄艦何艘かを造るに当るべく、惣ての文学者が消費する筆墨料を徴収すれば慈善病院三ツ四ツを設る事決して難きにあらず、惣ての文学者が喰潰す米と肉を蓄積すれば百度饑饉来るとも更に恐るゝに足らざるべく、若し又惣ての文学者を一時に殺戮すれば其死屍は以て日本海を埋むべく其血は以て太平洋を変色せしむべし。

文学者は一の社会問題なり、貧民が、僧侶が、娼妓が社会問題となれる如く。熟々考ふるに天に鳶ありて油揚をさらひ地に土鼠ありて蚯蚓を喰ふ目出度き中に

人間は一日あくせくと働きて喰ひかぬるが今日此頃の世智辛き生涯なり。学校の卒業証書が二枚や三枚有つたとて鼻を拭く足にもならねば高が壁の腰張か屏風の下張が関の山にて、偶々荷厄介にして箆筒に蔵へば縦令へば虫に喰はるゝとも喰ふ種には少しもならず。学士ですの何のと云つた処で味噌摺の法を知らずお辞義の礼式に熟せざれば何処へ行ても敬して遠ざけらるゝが結局にて未だしも敬さるゝだけを得にして責めてもの大出来といふべし。ミルトンは中々もての外なり。トヴの結局が博物館に乾物の標本を残すか左なくば路頭の犬の腹を肥すが世に学者としての功名手柄なりと愚痴を覆す似而非ナツシユ詰りなれど、さるにても笑止なるは世の是沙汰飯粒に釣らるゝ鮒男がヤレ才子ぢや伶俐者ぢやと褒めそやされ、偶さか活きた精神を有つ者あれば却て木偶のあしらひせらるゝ事沙汰の限りなり。騙詐が世渡り上手で正直が無気力漢、無法が活潑で謹直が愚図、泥亀は天に舞ひ鳶は淵に躍る、さりとは不思議づくめの世の中ぞかし。

斯る中にも社会に大勢力を有する文学者どのは平氣の平三で行詰りし世を屁とも思はず。春うらく蝶と共に遊ぶや花の芳野山に玉の卮を飛ばし、秋は月てらくと漂へる潮を觀て絵島の松に猿なきを怨み、嚴冬には炬燵を奢の高櫓と閉籠り、

盛夏には蚊帳を榮耀の陣小屋として、米は俵より涌き銭は臺口より出る結構な世の  
 中に何が不足で行倒れの茶番狂言する事かとノンキに太平樂云ふて、自作の小  
 説が何十遍摺とかの色表紙を付けて売出され、二号活字の広告で披露さるゝ  
 外は何の慾もなき氣樂三昧、あつたら老先の長い青年男女を墮落せしむる事は露思  
 はずして筆費え紙費え、高が大家と云はれて見たさに無暗に原稿紙を書きちらして  
 は屑屋に忠義を尽すを手柄とは心得るお目出たき商売なり。月雪花は魯か犬が子を  
 産んだとては一句を作り猫が肴を窃んだとては一杯を飲み何かにつけて途方もなく嬉し  
 がる事おかめが甘酒に酔ふと全じ。  
 斯くの如く文学者は身分不相応に勢力を有し且つ身分不相応にのんきなり。世  
 に氣樂なるものは文学者なり、世に羨ましき者は文学者なり、接待の酒を飲まぬ者  
 も文学者たらん事を欲し、落ちたるを拾はぬ者も文学者たるを願ふべし。  
 然るに世にすねたる阿呆は痛く文学者を斥罵すれども是れ中々に識見の狭陋を現  
 示せし世迷言たるに過ぎず。冷靜なる社会的の眼を以て見れば、等しく之れ土居  
 して土食する一ツ穴の蚯蚓の徒なれば何れを高しとし何れを低しとなさん。濁醪  
 を引掛ける者が大福を頼張る者を笑ひ売色に現を抜かす者が女房にデレる鼻

垂らを嘲あざる、之れ皆ひと他の鼻はなの穴あなの広ひろきを知しつて我わが尻しりの穴あなの窄せまきを悟さとらざる鳥澁をこの白しろ者と  
 いふべし。窮理きゆうり決けつして迂うなるにあらざる実践じつせん何なんぞ浅あさしと云いはんや。魚肴さかなは生なま臭くさきが故ゆゑ  
 に廉やすからず蔬菜やさいは土臭つちくさしといへども尊たふとし。馬むまに角つのなく鹿しかに※《たてがみ》なく犬いぬは※  
 と啼ないてじやれず猫ねこはワンと吠ほえて夜よを守まもらず、然しかれども自おのづから馬むまなり鹿しかなり犬いぬなり猫ねこなる  
 を妨さまたげず。稼かせぐものあれば遊あそぶ者ものあり覚さめる者ものあれば酔よふ者ものあるが即よち世よの実じつ相さうなれば  
 おのひとりかつて出で放ほう題だいをこねつけて好いい子この顔かほをするは云いはふ様やうなき歿わ分ぶん曉あや漢かん言語ご  
 己おのれ一人ひとりが勝か手てな出で放ほう題だいをこねつけて好いい子この顔かほをするは云いはふ様やうなき歿わ分ぶん曉あや漢かん言語ご  
 同断うだんといふべし。縦令たとひ石橋いしばしを叩たたいて理窟りくつを拈ひねる頑固党ぐわんこうとうが言ことの如ごとく、文学者ぶんがくしやを以もつ  
 放埒ほうらつ遊惰いうだ怠たい慢痴呆社まんちほうしゃ会かいの穀潰こくつぶし太平たいへいの寄生虫きせいちゅうとなすも、兎とに角かく文学者ぶんがくしやが  
 天下てんかの最幸さいかう最福さいふくなる者ものたるに少すこしも差さしつかへ。然しかるを愚凶ぐぶ々々々々と賢さかしらだちて罵のら  
 るは隣家となりのお菜かずを考かんがへる独身者ひとりものの繰言くりごとと何なんぞ扱えらまん。  
 加か之の、文学者ぶんがくしやを以もつて怠慢遊惰たいまんいうだの張ちやう本ほんとなすおせツかいは偶たまく怠慢遊惰たいまんいうだ  
 の却かへつかみ天啓てんけいに協かふを知らざる白痴ばかなり。謹つしんで慮おもんば神かみの御み恵めぐみ洽あまねかりし太古たいこ創さう  
 造ぞうの時代じだいには人間にんげん無為むゐにして家業かげふといふ七むづかしきものもなければ稼かせぐといふ世せ  
 話わもなく面白おもしろおかしく喰くつて寝ねて日向ひなたぼこりしてゐられたものゝ如ごとし。アダム飛とび塵ちりが働たら  
 いて喰くふといふ面倒めんどうを生しやうじは扱さても迷惑めいわく千万せんばんの事ことならずや。神かみが創さう造ぞうの御心みこころ

は人間を樂ましめんとするにありて苦ましめんとするにあらず。無為は天則なり、無  
 精は神慮に協へり。正直の頭に神宿る——嫌な思をして稼ぐよりは真ツ正直  
 に遊んで暮すが人間の自然にして祈らずとも神や守らん。文学者を以て大のンきな  
 り大氣樂なり大阿呆なりといふ事の当否は兎も角も眼ばかりパチクリさして心は藻脱の売  
 となれる木乃伊文学者は豈に是れ人間の精粹にあらずや。  
 且つ又聖經の教ふる処に依れば天国に行かんとすれば是非とも小児の心を有たざるべ  
 からず。小児の如くタワイなく、意気地なく、灣白で、ダグをこねて、遊び好で、無法  
 で、歿分曉で、或時はお山の大将となりて空威張をし、或時はデレリ茫然  
 としてお芋の煮えたも御存じなきお目出たき者は当世の文学者を置いて誰ぞや。  
 文学者なる哉、文学者なる哉。天変地異を笑つて済ますものは文学者なり。社、会、人  
 事を茶にして仕舞ふ者は文学者なり。否な、神の特別なる鼻屑を受けて自然に hypno  
 tize 《ヒプノタイズ》さるものは文学者なり。文学者なる哉、文学者なる哉。  
 我れ三文字屋金平夙に救世の大本願を起し、終に一切の善男善女をして悉く  
 文学者たらしめんと欲し、百で買ツた馬の如くのとたりくとして工風を凝し、虱を捫る  
 事一万疋に及びし時酒屋の厮童が「キンライ」節を聞いて豁然大悟し、茲に椽大の

しひのみふで ふるつあまね  
 椎実筆を揮て洽く衆生の為に為文学者経を説解せんとす。

右から見ても左から見ても文学者は最幸最福なる動物なり。我が拔苦与楽の説法を疑ふ事なく一函に有がたがツて盲信すれば此世からの極楽往生を決して難きにあらざ。銀価の下落を心配する苦劳性、月給の減額に氣を揉む神經先生、若くは身軀にもてあます食もたれの豚の子、無暗に首を掉りたがる張子の虎、来つて此説法を聴聞し而してのち文学者となれ。朝飯前の仕事にして天下を驚かす事虎列刺よりも甚だしく天下に評判さる事蜘蛛男よりも隆んなるは唯其れ文学者あるのみ、文学者あるのみ。

# 青空文庫情報

底本：「日本の名随筆60 愚」作品社

1987（昭和62）年10月25日第1刷発行

1990（平成2）年6月30日第5刷

底本の親本：「文学者となる法」右文社

1894（明治27）年4月

入力：奥村正明

校正：菅野朋子

2000年8月1日公開

2005年12月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 為文学者経

三文字屋金平

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>